

---

# 精霊流し

A Y A K A

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

精霊流し

### 【コード】

N7599C

### 【作者名】

AYAKA

### 【あらすじ】

死んだはずの母ちゃんが、何故か俺だけ見えた。これは、俺と母ちゃんの最後の夏の思い出……忘れんけんな、母ちゃん。

(前書き)

タイトルは「しよろろながし」と読みます。

精霊流し

「可哀想にねえ……」

「突然の病だったらしいな」

「初恵さん、八歳の息子一人残して逝ってしまっなんてねえ」

線香の匂いと、お坊さんのお経が流れるこじんまりとした部屋で、俺の後ろに座っている親戚の叔母さんや叔父さんは、何だかひそひそと内緒話をしているみたいだ。

みんな、真っ黒の服を着て悲しそうにうつむき加減だ。俺は座布団の上に正座して、隣に座る婆ちゃんを見た。そしたら婆ちゃんはハンカチでしわしわの目を覆って泣いていた。

お坊さんの前には仏壇があって、そこにお花や母ちゃんの遺影が飾られてる。なんでみんなそんなに悲しいんかな？

俺にはさっぱり分からない。だって、母ちゃんなら今俺の隣に座ってるぞ。

「なあなあ母ちゃん、どうしてみんな泣いてるんかな」

「さあ、何ででしょうね」

「母ちゃんも知らんぞ？」

「そうね、何でかしら」

母ちゃんは、そう言うてにっこりと笑うと、白くて優しい手で俺を撫でてくれた。

「これ太一、独り言なんか言つとらんで、ちゃんと心の中で母ちゃんにお別れをするんだよ」

「お別れ？」

俺の隣に座る婆ちゃんには、母ちゃんが見えないんかな？間に俺がいるから見えないんかな？

「なあ婆ちゃん、母ちゃんならここに居るよ」

「何言つとるんだいこの子は……母ちゃんが死んだこと、受け入れられんのはよくわかる。でもな太一、初恵は死んだんだよ……あの桶の中で初恵が眠つとるのは、さっきお前も見ただろう」

婆ちゃんはそう呟いて、またハンカチで目を覆ってしまった。変な婆ちゃんだな。だけん、母ちゃんならここに居るのに。

「まあ、こんなに美味しそうな御馳走が並んで」

母ちゃんは俺の隣で、目の前に並べられた精進料理しょうじんりょうりに嬉しそうに両手を合わせた。正座で痺れた足はまだ少しジンジンするけど、俺もかなり腹ペコだな。

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

料理は野菜中心だから、野菜嫌いの俺は寿司とか豆ばっかり頼ばった。そしたら、母ちゃんが

「野菜もちゃんと食べなさい」って怒った。

「母ちゃん食べんと?」

「お母さん、お腹減ってないから」

「ふうん」

母ちゃんはにっこり笑って、ただ俺が食べるのを嬉しそうに眺めとるだけだった。

「これから太一はどうするんだい」

「うちで引き取ることにした。勝彦さんも初恵と離婚してから連絡が取れんけん……せめて太一が大きくなるまでは、儂も死ねん」

「え? なんで? 俺婆ちゃん家に引越すと!?!」

俺が婆ちゃんと親戚の叔母さんの話に割って入ると、婆ちゃんはさも当たり前みたいな顔になった。

なんで? 俺は今まで通りに母ちゃんと二人暮らしがいい。俺婆ちゃん好きやけど……引越すって、学校も転校せんといかんやろ、友達と離れるなんてそんなの嫌やん!

「ここしか太一が暮らせる場所は他にないんだよ。もう母ちゃんはおらん、だけん婆ちゃんと一緒に……」

「そんな事言うな、母ちゃんならおるぞ! 俺の隣に、ここにちゃんとおるやろ!」

つい、婆ちゃんに怒鳴ってしまった。だって婆ちゃんも叔母さん

も、母ちゃんが目の前に座つとるのにおらんって……。こんな、母ちゃんが可哀想やんか。今ので、他の話をしていた人達も一斉に俺を振り返った。みんなが、俺を変な目で見つめてくる。俺は本当の事を言っただけだぞ、今だってほら、母ちゃんは俺の隣に……」

そこについさっきまでおった母ちゃんの姿は無く、俺は言葉を失ってしまった。

「太一……母ちゃんの死を、ちゃんと受け入れないかん。じゃないと、初恵はいつまで立っても成仏して極楽浄土に逝かれん」

「……………」

母ちゃん……どこにいったんだよ。俺を独りにすんなよな。トイしだろ？すぐに帰ってくるよな？お願いやけん、父ちゃんみたいに俺を置いていたりせんくれよ……」

「……………母ちゃん」

焼却場から帰ってきた後、俺は婆ちゃん家の縁側に座ってぼつと空を眺めていた。

お日様は既に西の地平線に沈み、夕焼け空にだんだんと夜が見えてきた。

「母ちゃん、本当に死んでしまったんかな……」

「誰が死んだんですって？」

「うわあ、母ちゃん！ いきなり驚かすなよ」

いつのまにか母ちゃんは、縁側に座る俺の隣に座って、ここに俺をのぞき込んできた。

そしてすつと立つと、卓袱台ちやくぶだいに歩いて行って俺を手招いた。

「太一、冷えてきたでしょ。ほら、温かいお茶でも飲みなさい」

卓袱台の上には、いつの間にかほわほわと湯気がたつ緑茶が置かれていた。母ちゃんが淹れてくれたんかな。

「やっぱり婆ちゃん家は田舎やな。もうすぐ夏なのに、夜は寒かもん」

「あら、私達の住んでる所とあまり変わらないでしょうに」

「いや変わるね、ここはもっと田舎やもん。この前俺さ、野生のイノシシ見たんだぞ。凄いだろ！」

俺は緑茶を啜すすりながら、得意気に母ちゃんに話しを聞かせた。母ちゃんはうんうんと、にっこりと笑って頷いてくれた。

「婆ちゃんは嘘つきやな、やっぱり母ちゃん生きとるやんか」

俺がぼつりと漏らした呟きに、母ちゃんの顔が少し悲しそうになった。

「そうね、変なお婆ちゃんね」

そう笑って、母ちゃんはすぐ後ろを向いた。だけど俺は母ちゃん

の悲しそうな顔、この目ではつきりと見た。なんで……なんでそんな悲しそうな顔するんだ、母ちゃん……

「太一、風呂沸かしたけん先に入っといで」

突然、婆ちゃんが声をかけてきた。いきなりだったから、俺は一瞬驚いて婆ちゃんを見た。だって、足音も聞こえなかったぞ。

「なんだね太一、婆ちゃんの分のお茶まで淹れてくれたんか」

婆ちゃんはそう言って、卓袱台の前の座布団に腰を落とすと、淹れたての緑茶を啜った。ズズツ…と音が零れる。ちよつと待て婆ちゃん、俺がいつお茶を淹れたんだ？

「俺じゃないぞ。婆ちゃんのお茶を淹れたんは母ちゃんだぞ。な、母ちゃん！」

「……」

……なんで母ちゃん黙っとるんだよ。

母ちゃんは黙ったまま、お茶を啜る婆ちゃんを眺めとった。

「……初恵はもうおらん。けども、もしこれが初恵の淹れてくれたお茶なら、婆ちゃんこんな嬉かことは……」

婆ちゃんのしわしわの目から、一粒の綺麗な滴が畳に落ちて吸い込まれた。

婆ちゃんには、母ちゃんが見えてない。母ちゃんは……本当に死んだんだ。

その証拠に、涙を流す婆ちゃんのシワだらけの手を包み込んだ母

ちゃんの手のひらは、婆ちゃんの手のひらと重なること無く透けてしまった。

この時初めて、俺は母ちゃんが死んだんだと実感した。

「それにしても、何で俺にだけ母ちゃんが見えとるんやろ……」

俺は湯船に浸かって考え事をしながら、水滴が溜まった天井をぼんやり眺めていた。ほわほわした湯気が、浴室内を白く充<sup>み</sup>たしていく。

「さあ、なんででしょうねえ」

「かか、母ちゃん?! 風呂までくんなよ!」

俺は慌てて男の大切な部分を隠した。いつの間にか母ちゃんが、浴室の扉から顔だけを覗かせていたからだ。扉に、母ちゃんの顔だけが生えた状態……これならちよつとしたホラーやんか。

「わ、見るなよ母ちゃん!」

「うふふ、見ませんよ。太一の背中流そうかと思ったの」

「お、おう」

俺は洗面所からタオルを取ると、それを腰に巻き付けてプラスチック製のイスに腰掛けた。

すると母ちゃんが石けんを取ろうと手を伸ばした。が……

スウッ

母ちゃんの手は石けんに触れることなく透けた。何度やっても、母ちゃんの手は半透明に透けてしまう。

「……駄目みたい。ごめんなさいね、さっきはお茶淹れられたんだけどね……」

悲しそうに、母ちゃんが笑う。母ちゃんのそんな笑顔、俺は辛い

……

「いい、自分で出来る」

俺はネットで石けんを泡立てると、わしゃわしゃと体を洗った。ついでにそのまま石けんの泡で頭も洗う。

涙が溢れたのは、きつと石けんの泡が目に入ったせいだ。男は泣かん……母ちゃんの前では、絶対泣けん。

夏休みに入って間もなく、俺は婆ちゃん家に引っ越した。それまで

は学校もあるし、俺の家の近くに住んでいる叔母さんの家でお世話になっていた。

「ほら、太一見てみ」

「うわ、何これ!？」

これといってすることも無いので、俺は婆ちゃんに付いて畑に来ていた。そしたら、退屈そうにしていた俺を見て婆ちゃんが、何かの殻を投げてよこした。

「そりゃセミの抜け殻さ」

「へえ」

初めて見た。これが、木にとまってnear煩く鳴きわめくセミになるのか。力を込めたら潰れてしまいそうな殻を、俺はそつと掴んで空にかざした。さつきから傍の森で、セミの鳴き声が響きわたっていた。

「婆ちゃん、ちょっとそこら辺探検してくる!」

婆ちゃんは「いつといで」と手を振って、暗くなる前には戻るように促した。

俺は返事の代わりに片手を上げて、畑から小道にでた。綺麗に澄んだ青空と、見渡す限り田畑が広がるこの風景を堪能しながら、俺は近くの小川まで歩いていった。

## 精霊流し

小川には数人の小学生の姿があった。見たところ、年は俺と同じぐらいだ。わいわい楽しそうに魚取りをしている。その中の1人が、

俺に気付いて近付いてきた。鼻に絆創膏ばんそうこうを貼ったそいつは、ガキ大将がきだしょうって言葉がよく似合う。

「おい！ 誰だお前？ 見らん顔やな」

「俺のことか？ 太一、宮川太一！ 婆ちゃん家に最近越してきた」

「ふうん……何年？」

絆創膏のそいつは腕組みをして、俺をまじまじと眺めている。俺が「2年」と応えると、そいつは俺より1つ上の3年だと言った。年上のクセに、ちっさいな。背は俺と同じぐらいだぞ。

「俺は矢塚 翔。仲間に入れちやる、一緒にハヤ捕まえんか？ 俺達が教えたるぞ」

「お、おうー！」

俺は翔に連れられ、水中のハヤを追う集団に混ざっていった。気が付けば、そいつらともすんなり打ち解けて、俺は日が落ちるまで夢中で遊んでいた。

翔達と別れた後、既に薄暗い夜道を、いつの間にか来ていた母ちゃんと俺は並んで歩いた。辺りは静かで、時折虫の鳴き声だけが聞こえる。

「……あ」

ふと、俺は小さな声を漏らした。草藪くさむすぶでホタルが光ったからだ。ほんのりしたホタルの光はとても綺麗で、つい捕まえようと手を伸

ばした。

「あのね太一……たとえ小さなホタルでも、彼らはこの時を必死に生きているの。だから、そっと見守ってあげましょう」

母ちゃんはそう言ってホタルを眺めながら、優しく俺の頭を撫でた。不思議と俺に触れる母ちゃんの手は透けることなく、俺に母ちゃんの温もりが伝わってくる。

俺は素直に頷き、その場を離れようとした時だった。

草藪から、いつせいにホタルが飛び立ったのだ。ホタルの幻想的な光は、夜空に散らばる億千もの星々と重なり合い、さらに綺麗な輝きとなって夜空を埋め尽くした。

「……綺麗だな、母ちゃん」

「……ええ、とつても」

俺と母ちゃんは、いつまでも、いつまでもこの綺麗な夜空を眺めていた。

やがて7月も終わり、8月がやって来た。

「精霊流し？」

俺は婆ちゃんおばちゃんの口から飛びだした聞き慣れない単語に、眉をひそめて首を傾げた。精霊流し（しょうろうながし）って何やる……？

「15日の夜にな、宇田川にお舟さん流して、御先祖様の魂が極楽浄土にちやあんと帰れるように、みんなで見送るとたい」

「ふーん、なんか知らんけど楽しそうやな」

俺はニツと白い歯を見せて、仏壇の前で拝む婆ちゃんおばちゃんに笑いかけた。15日か……ならあと3日やな。

「あら太一、もうみんな朝ご飯食べてるけん。あんたも早くいきな」

お盆休みということで帰省して来ていた叔母さんが、襖ふすまを開いて俺を呼んだ。朝からえらく元気な声やん。

「早よせな、玉子焼き無くなっても叔母さん知らんよ」

お、それはいかん。今日は幼稚園の子こび達も来とるし、本当に玉子焼きを食べ損ねるかもしれんな。

「じゃ、婆ちゃんお先に！」

俺は慌てて居間に駆け戻った。案の定子こび達は玉子焼きやらウインナーやらに群がっていて、ギリギリセーフでなんとか俺もおかずくさずにありつくことが出来た。

「太一、美味しい？」

「うん、うまい！」

母ちゃんは王子焼きを頼む俺の後ろで、嬉しそうに微笑んだ。その母ちゃんの体を、食事を終えて騒ぎはじめたチビ達がすり抜けて走り回っている。誰も、母ちゃんがここにいることは気付かない。それはそうやな、だって母ちゃん見えるの俺だけやしな。

「……もうすぐね」

ふと、母ちゃんがカレンダーを眺めながら呟いた。その横顔はなんだろな……淋しそうな憂いが浮かんでる。もうすぐって、何がやるのか……？でも俺は母ちゃんにその事を聞くことが出来なかった。本当は、心の片隅じゃ分かったのかもしれない。でもそれを受け入れる事を避けて、わざと知らんふりをしたのかもしれない。

……15日の夜、それは俺と母ちゃんの別れの夜……

母ちゃんと過ごした日々を惜しむ間もなく、別れの日は無情にもすぐにやって来た。

「綺麗なお月様ね」

宇田川に向かう親戚の列の最後尾を歩いとった俺に、母ちゃんは

青白く輝く満月を見つめたまま囁いた。

「……………うん」

俺がチラリと夜空を見上げると、この目に綺麗で立派な月が映った。気高く空からこの世界を包み込む月に、心癒される。不安でいっぱいなのに俺の心が、月を眺めるとなぜか落ち着く。

「ねえ太一……………手、繋ぎましようか」

そう言う母ちゃん。俺が無言で左手を差し出すと、母ちゃんは自分の右手で俺の手を握ろうとした。でも、母ちゃんの手と俺の手が繋がることは無く、スウツと抜けた。

「うふふ、やっぱりもう駄目みたい」

「……………母ちゃん」

母ちゃんにもわかつとつたんだと思う。もう、俺に触れることさえ出来ないって事……………。

母ちゃんは困ったように微笑んで、手を引つ込めようとした。だけど俺は左手を差しだしたまま、そのまま歩いた。気付いた母ちゃんも、決して繋がることは無いけど、俺の手に自分の手を重ねた。

「お……………船ちゃん」

川沿いの道を歩いていると、ぼんやりと明かりが灯った小さな船が、いくつも川を流れてきた。

あれが、死んだ人の魂を霊界へと送りだす精霊船なんか。

夜の宇田川には俺達の他にも、沢山の人がおった。  
みんな流れていく精霊船を見送りながら、静かに川を眺めとる。

「ほら太一、あんたが精霊船を川に流しんしゃい。これで母ちゃんを送ってやるんよ」

「……わかった」

俺は小船を受け取ると、そっと川の水面に下ろした。

「……母ちゃん、お別れやな……」

俺はしゃがんで船を掴んだまま、母ちゃんを見上げた。そしたら、母ちゃんは俺を優しい眼差しで見つめたまま、ゆっくりと頷いた。

「太一……」

「……母ちゃん……」

一粒の雫が、俺の頬を伝った。こらえていた涙が、とめどなく溢れた。悲しくなんか……悲しくなんか……ない。俺は男やけん、母ちゃんの前で泣いたらいかん。

俺が俯いて必死に齒を食いしばっていると、母ちゃんは愛おしく俺を抱き締めてくれた。

その瞬間、母ちゃんは金色の光に包まれて、ほんの一瞬だけその姿がはつきりと現れた。

「ごめんね……あなたを残して逝くお母さんを……許して」

笑顔だった母ちゃんの瞳からも、温かい澄んだ涙が零れ落ちた。俺を抱き締める母ちゃんの腕に、自然と力が込められる。

「もう……逝かないとね」

母ちゃんは名残惜しそうに俺を離すと、黙って見守っていた婆ちゃんに振り返って一礼した。

「お母さんごめんなさい、こんな親不孝な娘で……太一を、お願いします」

婆ちゃんは涙で言葉にならない言葉を絞りだしながら、何度も何度も頷いた。

「太一、お母さんいつもあなたを見守っているからね……」

俺は母ちゃんの最後の言葉に頷くと、そっと船を離した。明かりの灯った精霊船と共に、母ちゃんはだんだんと遠ざかっていく。

「母ちゃん！俺、母ちゃんの息子で良かった！ちゃんとい子でおるけんな、だけん何も心配せんであの世に逝っていいけんな！」

たとえ涙と鼻水が混ざり合って口に入っても、視界が涙でぼやけようと声が枯れようと、遠ざかっていく母ちゃんに向かって、俺は叫び続けた。

「母ちゃん、元気でな！」

やがて母ちゃんのを金色の光が包み込み、手を振りながら母ちゃんは消えていった。

「……逝ってしもうた」

サワッ……

「……あ」

一陣の風が吹き抜けた後、川の草藪くさやぶからホタルの群れが飛びたち、光の川となつて夜空に舞い上がった。ゆらゆら流れゆく精霊船を照らす儂なまくも強いその光は、きっと母ちゃんの魂を天国へと導いてくれるだろう。

さようなら、母ちゃん

END

(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございます！博多弁が読みにくかったらすみません(\*´`´\*)でも、田舎っぽさはだせたかな？指摘でも何でも、読んでの率直な感想をいただけたら嬉しいです。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7599c/>

---

精霊流し

2008年8月29日19時13分発行